

[社 会]

思考力・判断力を育てる中学校社会科授業の展開

-資料の活用とワークショップ型授業, 自己内対話・他者対話を通じて-

坂田 和也*

1 研究の目的

中学校の社会科では、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う¹⁾」ことを教科の目標としている。「公民的資質の基礎」とは、日本や世界のさまざまな社会的事象に関心をもつこと、それらを多面的、多角的に考察し、公正に判断すること、わが国の国土や歴史に対する理解と愛情を深めること、国際協力、国際協調の精神を養うことなどを指している。学習指導要領の改訂に先立ち、平成20年1月に中央教育審議会答申が出された。答申は社会科の「改善の基本方針」の一つとして、「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育成する観点から²⁾」、資料活用能力や社会的思考力・判断力・表現力を育てる学習活動を充実させることを掲げている。公民的資質の基礎を養うにあたり、社会的事象の意義を解釈したり説明したりする力、自分の考えを論述したり、議論を通して考えを深めたりする力を育むことが求められている。安野功は、その際、「問題解決的な学習を軸として、知識や技術と思考力・判断力・表現力等を同時に育てていきたい³⁾」と説いている。すなわち、「基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成を切り離して行うのではなく、問題解決的な学習を軸とした一連の流れの中で相互補完的に、あるいは相乗効果が生み出されるように、両者の指導の充実に努めていくこと⁴⁾」が求められている。

社会的な思考力・判断力を育てるためにこれまで多くの実践が行われてきた。松岡貴徳は、歴史的事象の多い旧城下町・高田(上越市)の地域素材に着目し、対話を手立ての核とした学習課題を設定している⁵⁾。社会的な思考力・判断力を育てる手立てとして、松岡は、子どもたちの学びの過程には、「学びを関係づけ、学びをつむぎ、創り変えていく構造が内在化されており、他者対話と自己内対話の手立てが相互に関わることにより、子どもの思考過程が質的に高まり、思考力そのものが育まれる」ことを明らかにした。荒井隆浩はその手法を受け、歴史的事象に関する価値ある資料を提示し、その歴史的事象の背景や歴史上の人物の取組について「対話」を通して考え、働きを評価する学習課題を設定している⁶⁾。また、池田岳康は、「社会的な思考力・判断力は社会的事象に関わる一人一人が得た情報を、整理、比較、検討、交流という学習の過程を培わなければならない」として地域のスーパーマーケットを題材とし、体験に基づいた学習課題を設定している⁷⁾。他にも、西塚智行は、既存の知識や学習を通して得た気付き、発見をノートを用いて整理、比較、統合することにより、子どもたちの社会的な思考力を高めようと試み、地域の清掃工場を題材とした学習活動を設定している⁸⁾。

これらの実践は、対話を手立ての核としたり、体験や見学をもとに学習課題を設定したりしていることから、既述の「問題解決的な学習を軸」とした学習であるといえることができる。しかしながら、いずれも小学校社会科における実践であり、中学校社会科における実践はまだ少ないようである。中学校社会科は、学習内容が多く広範囲に及んでおり、一つ一つの社会的事象にじっくりと時間をかけて学習を行うことが困難であることも要因の一つとして考えられる。そこで、今回、中学校社会科の歴史的分野における、時代の転換に関わる基本的な内容を定着させる学習の場面に焦点を当て、歴史について考察する力や説明する力を育てる実践を行ってみたいと考えた。

子どもたちの社会的な思考力・判断力を育てる手立てとして、松岡は「対話」を重視した。また、荒井は歴史的事象に関する価値ある資料から、その歴史的事象の背景や歴史上の人物の取組について「対話」を通して考え、働きを評価する活動を行った。これらの実践をもとに、一つの手法として、ワークショップ型の授業を行い歴史上の人物の立場に立って多面的・多角的に歴史的事象をとらえさせることにより、子どもたちの思考力・判断力を育てたいと考えた。本実践では、その指導の在り方について明らかにしたい。

* 魚沼市立入広瀬中学校

2 研究の仮説

歴史的分野の学習において、歴史的事象に関する価値ある資料を提示し、歴史的人物の取組についてワークショップ型の授業を行う。その人物の立場に立って多面的・多角的に歴史的事象をとらえさせ、また「対話」を通じて考えを深めることにより、子どもたちの思考力・判断力を育てることができる。

本單元においては、承久の乱における朝廷側・幕府側のそれぞれが御家人に対して働きかけた資料をもとに、御家人の葛藤を体験的に学び、ワークショップで子どもたちがそれぞれの考えや感想を交流していくことで、朝廷側・幕府側それぞれの思惑や歴史的意義を考え、多面的・多角的に考察していく力＝社会的な思考力・判断力が育つ姿が表れる。

3 研究の内容・方法

(1) 本単元の構成と位置づけ

① 単元名

「武家政治の始まり」より小単元「執権政治・承久の乱」

② 目標

承久の乱に関する朝廷側・幕府側の資料をもとに、承久の乱に際しての御家人の葛藤の追体験と友人との意見交換をしながら、当時の時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開について、自分の考えを深める。

③ 単元でめざす子どもの思考する姿

承久の乱に関する資料や御家人の置かれた立場をもとにした自己内対話、友人との意見交換を通じた他者対話を通して、当時の時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開について理解していく姿。

(2) 単元展開の構想

本単元は、「武士が台頭し武家政権が成立したこととその後の武家社会の展開を理解させる」（中学校学習指導要領解説―社会編―）ことを主なねらいとしている。

武士の起源は平安時代中期頃である。中央で貴族中心の政治が行われていた当時、武士は地方で土地を開墾し領地を獲得した地主的存在、あるいは荘園の警備役として登場したとされる。地方の武士は多くの場合、開墾した土地を自力で守っていくしかなかった。このようなことから、源頼朝によって鎌倉幕府が成立し、将軍と主従関係を結ぶことで、先祖伝来の領地を認めてもらい保護してもらうことは、武士にとって非常に重要なことであった。幕府もまた、はじめから全国の武士を従えていたわけではなく初めは不安定であったので、乱の平定などを通じて、将軍と御家人の封建関係を結ぶことが政権の安定のために重要なことであった。こうして武士による封建社会が成立していく。

「承久の乱」は、朝廷と幕府による二重支配体制が、幕府の支配力がより強固なものに変わる転機となる出来事である。これ以降、明治維新まで封建社会が展開されることから、乱のもつ歴史的意義は大きい。また、源氏の将軍が三代で絶えたことを契機に朝廷に政権を取り戻そうとした後鳥羽上皇、朝廷を退け執権政治をもとに鎌倉幕府による支配を確かなものにした北条氏、「朝廷側」・「幕府側」どちらについて戦うかの選択を迫られた御家人たちと、複数の人物の立場に立たせて多角的に考察し、事象のもつ多面性をとらえさせる上でも、「承久の乱」はふさわしい教材であると考えられる。

生徒本人の生活体験や意見からだけでなく、既習の学習内容や承久の乱についての資料をもとに、御家人の置かれた立場から「自分が当時の御家人であったら、朝廷側・幕府側のどちらにつくか」を自分なりに考え（自己内対話）、友人との意見交換（他者対話）を通して、封建社会のしくみ（自分の領地の安堵という武士の根本の問題）を体感し、当時の時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開について自分の考えを深めさせたい。

4 実践の概要

(1) 単元計画

① 事前の学習「承久の乱における御家人の葛藤」を考える上での基礎・基本的知識となる史実の理解（2時間）

時	ねらい (○) 学習内容 (・)	留意事項 (※) 評価 (●)
1	「武士のおこりと院政」 ○武士のおこりと台頭について、地方や都で起きた戦乱の様子や院など権力との関係から理解する。 ・武士のおこりと台頭について理解する。 ・上皇による院政や朝廷内の対立に乗じて平氏が政権についたこと、源平の合戦への流れを理解する。	※武士は地方から起こってきた地主的存在であり、皇族や貴族に仕える身分（下の身分）として、院や荘園の警護や反乱の鎮圧などを通して勢力を伸ばしていったことを理解させる。 ●武士のおこりと台頭について、中央の政治との関連から説明できる。

1	<p>「鎌倉幕府の成立」</p> <p>○武家政権の誕生と発展の様子を幕府と朝廷の関係などから理解する。</p> <p>・鎌倉幕府の成立の経緯や武家政治のしくみ、将軍と御家人の主従関係や守護と地頭の役割について理解する。</p>	<p>※武士による新しい政治組織としての幕府の誕生と朝廷と幕府による二重支配について、イラストや図表を用いて理解させる。</p> <p>※朝廷としては、武士による支配や幕府の誕生を快く思っていないことを理解させる。</p> <p>●武家政治の仕組と朝廷との対立について理解できる。</p>
---	--	--

② 「承久の乱」に関する朝廷側・幕府側の資料をもとに、御家人の葛藤の追体験と友人との意見交換をしながら、自分の考えを深める学習（1時間）

- ・承久の乱における御家人の立場を追体験することにより、武家社会の特色と承久の乱の歴史的意義を考える。
- ・仲間と交流し合う中で、様々な考えがあることに気づくとともに、自分の考えを深めることができる。

学習活動（・）	子どもたちを対話に導く支援（・）	評価（●） 指導上の留意点（※）
○本時の発問・活動の提示	・ワークシート配布	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 朝廷側・幕府側。どちらに従って戦う？—鎌倉幕府の御家人の立場で考えよう！— </div>		
	・1221年、後鳥羽上皇が北条義時追討の院宣を出したことを説明する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 資料の提示1・2 後鳥羽上皇の院宣と北条義時・泰時の会話を提示し、生徒を指名して読ませる。 </div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;"> <思考の第1階層>…自分の考えを明確にする。 </div> <p>・院宣と会話をもちに、自分が御家人であつたらどちらにつくかを考え、教室内のコーナー3カ所（幕府側・朝廷側・考え中）の1つに移動し、理由を記入する。：自己内対話</p> <p>・教室内を移動して、他のコーナーの人と意見交換しシートを記入する。：他者対話</p>	<p>○自分なりの考えをもつ活動</p> <p>・資料をもとに、御家人の立場から考えさせる。教室内に3ヶ所のコーナー（幕府側・朝廷側・考え中）に移動させ、自分の考え・判断理由を記入させる。</p> <p>・他のコーナーの生徒と意見交換させ多様な考えに触れさせる。</p>	<p>●資料をもとにして御家人の立場から理由を書いている。（思考判断・資料活用）</p> <p>※活動前との立場の変更も認める。なぜ考えを変えたかを大事にさせる。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 資料3の提示 北条政子の訴えを提示し、生徒名を指名して読ませる。 </div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;"> <思考の第2階層>…自分の考えを多面的に問い直す。 </div> <p>・北条政子の訴えをもとに、再度、教室内のコーナー3カ所（幕府側・朝廷側・考え中）の1つに移動し、理由を記入する。：自己内対話</p>	<p>○自分の考えを問い直させる活動</p> <p>・新しく提示した資料をもとに、再度、幕府側・朝廷側のどちらにつくかを考えさせる。既習事項や資料をもとに御家人の葛藤を理解し、自分なりの判断理由をもたせるようにする。</p>	<p>●新たに提示された資料をもとに、再考して自分の判断理由を書いている。（思考判断・資料活用）</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;"> <思考の第3階層>…本質を探りながら自分の考えを再構築する。 </div> <p>・幕府側と朝廷側に分かれて、対面式の意見交流会を行い、考えを深め、最終決断をおこなう。：他者対話</p>	<p>○多面的な視野から社会的事象を判断する活動</p> <p>・全体で対面式の意見交流会を行い、最終決断させる。</p>	<p>●判断理由を踏まえて、論点にそった意見交換ができてきている（思考判断）</p> <p>●意欲的に意見交換を行っている（関心意欲）</p>
<p>○承久の乱の結果と影響</p> <p>・ワークシートの記入・乱の結果を説明する。</p>	<p>・多くの御家人がとった行動と乱の影響を考察し、本時の学習について振り返る。</p>	<p>●御家人の動きを考察し、意欲的に意見・感想を書いている。（関心意欲・思考判断）</p>

③ 事後学習「朝廷側・幕府側双方からみた承久の乱の歴史的意義」を考え、時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開についてより深く理解する学習（1時間）

時	ねらい（○） 学習内容（・）	留意事項（※） 評価（●）
1	<p>○朝廷側・幕府側双方からみた承久の乱の歴史的意義を考える。</p> <p>・当時の時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開についてより深く理解する。</p>	<p>※前時の学習をもとに、承久の乱を多面的に考察する。</p> <p>●乱の結果、幕府の支配が西日本に及び、武家政治の基礎が確立されたことが理解できる。</p>

(2) 指導の実際

① 事前の学習「承久の乱における御家人の葛藤」を考える上での基礎・基本的知識となる史実の理解、本時に至るまでの事前準備

単元の学習に先立って行った鎌倉時代についてのアンケートでは、源頼朝が鎌倉幕府を開いた事実や武士の生活、

肖像画から北条政子と判断できた生徒が多く、北条政子が演説で有名であることを何となく知っているという生徒も数名いた。

武士のおこりと台頭、鎌倉幕府の誕生、幕府と朝廷による二重支配体制についてしっかりと理解しておくことが、承久の乱における御家人の葛藤を考える上で重要になることから、イラストや図表を用いて重点的に説明を行った。鎌倉幕府の基礎的内容として、特に将軍と御家人の土地を仲立ちにした主従関係については、生徒が自分の言葉で説明できるように発問を工夫して授業を行った。

② 「承久の乱」に関する朝廷側・幕府側の資料をもとに、御家人の葛藤の追体験と友人との意見交換をしながら、自分の考えを深める学習

ア 思考の第1階層…自分の考えを明確にする

○資料「後鳥羽上皇の院宣」と「北条義時・泰時の会話」をもとに、自分なりの考えをもつ活動の様子

院 宣

鎌倉幕府が成立してからというもの、幕府の役人たちは朝廷の権威をも恐れず、わがもの顔で振る舞っている。特に、執権北条義時は、源氏の将軍亡き後、まるで鎌倉幕府の将軍であるかのように振る舞い、権力を握っている。朝廷を恐れぬその態度は、実に許しがたい。

よって、全国の武士たちに命令である。

執権 北条義時を打ち倒すべし

この命令に従った者は、褒美は望むままに与えられると心得よ。さあ、今すぐ、北条義時の首を持って参るがよい。

後鳥羽上皇

資料1 後鳥羽上皇の院宣

鎌倉幕府 執権 北条義時と、その子 泰時が、都に攻めのぼる前に交わしたという会話

泰時：「父上、これからの戦のときに、もし、上皇が自ら兵をひきい、先頭に立って攻めてこられたならば、どういたしましょうか？私は、その上皇に弓を向けてもよいのでしょうか？」

義時：「泰時よ、もし、上皇がみずから出陣されたときは、もはや我々は武器を捨てて降伏するよりほかない。しかし、上皇が都にいて、その軍隊だけが攻めてきたのなら、あくまで戦うがよい。」

資料2 北条義時・泰時親子の会話

まず、後鳥羽上皇の院宣とそれ受けての北条義時親子の会話を提示して、生徒を指名して読ませた。自分が御家人であったら、朝廷側・幕府側のどちらに味方するかを考えさせた。ワークシートに自分の考えの記入を行い、各コーナーに分かれたときの内訳は次の通りであった。

朝廷側：8名、迷っている：3名、幕府側：5名（生徒数16名）

朝廷側を選んだ生徒の理由としては、院宣の内容から「源氏の将軍が亡くなっているから」、「朝廷に対して無礼だから」、「義時を打ち倒せば、褒美がたくさんもらえるから」、会話の内容から「上皇が兵を率いてきたら、幕府側は勝てないから」、「幕府側が弱腰で、上皇を怖がっているから」などであった。幕府側と答えた生徒の理由としては、「御家人という立場上、幕府側で戦うしかない（負けたら、武士らしく潔く死ぬ）」、「上皇自ら兵を率いてくる可能性は低いと思うから」、「弱い立場の幕府側について戦に勝てば、かえって褒美がたくさんもらえると思うから」などであった。迷っていると答えた生徒は、「少し様子を見守りたい（有利な方に味方したいから）」、「現段階では、どちらについたらいいか判断しかねるから」、「危険なので、どちらにもつきたくないから」などであった。

生徒たちの意見からは、二つの資料の内容をもとに、「勝敗」や「褒美の多少」という観点から、判断している傾向が強く見られた。御家人という立場を踏まえた理由づけは、生徒16名中2名で少数であった。「迷っている」を選択した3名の生徒のうち2名からは、「事の成り行きによってどちらにつくか決める」という考え方がうかがえる。よって、御家人という立場の理解という点は弱いものの、ほぼすべての生徒が、資料をもとに自分の考えを明確にすることができたと考える。また、自分の立場を選択する様子からは、大して迷っている様子は見られず、多くの生徒がすんなりと各コーナーに移動していた。この点からも、御家人の葛藤を追体験している様子は見られなかった。

○自分と異なる立場を選択した生徒と意見交換する活動

次に、自分と異なる立場を選択した生徒との意見交換を行った。意見交換を行う中で、自分の考えを訴えて議論を始める生徒が現れはじめた。「後鳥羽上皇は自ら兵を率いて実際に陣に出陣したんですか？」、「朝廷側・幕府側どちらの方に多くの武士が味方しようとしたのですか？」、「幕府側が朝廷側に勝利するのはどういう状況なのか？上皇の命を奪うことはできないのに」など、幕府側・朝廷側どちらにつくかを判断するために、新たな情報を求める有意義な質問も多数出された。同じ立場を選択した生徒同士の中でも、「ああ、そうかそういう考え方もあるよね」と気づき、また、理解に苦しんでいる仲間を助け、一生懸命に説明している様子もうかがわれた。

意見交換を通じて、生徒たちは多様な考え方にふれ、少しずつ判断理由を深める生徒が現れはじめた。朝廷側・幕府側のどちらにつくかを判断する上でのポイントも明確になってきたが、この段階でも、「御家人の立場で考える」

という点は弱かった。

イ 思考の第2階層…自分の考えを多面的に問い直す

○資料「北条政子の訴え」をもとに、自分の考えを問い直す活動

次に、北条政子の訴えを提示して、生徒を指名して読ませた。自分が御家人であったら朝廷側・幕府側のどちらに味方するかを、再度考えさせた。再び、ワークシートに自分の考えの記入を行い、各コーナーに分かれたときの内訳は次の通りであった。

朝廷側：1名、迷っている：2名、幕府側：13名（生徒数16名）

朝廷側を選択していた生徒8名中7名が、幕府側を選択。「迷っている」を選択していた3名から1名が幕府側に立場を変えた。

朝廷側に残った生徒の理由としては、「やはり上皇には逆らえない」、「源氏の将軍はすでに絶えているから」などであった。幕府側と答えた生徒の理由として新たに挙がってきたものとし

ては、「源氏の将軍は絶えていても、今の自分たちの生活があるのは、将軍頼朝のおかげだから、御恩に報いなければいけない」、「幕府側が負けたら自分たちの生活も惨めだったころに戻ってしまうかもしれない」、「鎌倉を都の兵士に荒らさせるわけにはいかない」、「北条政子の訴えに感動した（そこまで言われたら、従うしかない）」、「上皇が兵を率いて来ようが来まいが、もう一か八かでやるしかない」、「多くの御家人が従うと思うので自分も従う」などであった。迷っていると答えた生徒は、「やはりどちらにつくとも言えない（判断しかねる、武士という立場上、どちらからつかなければいけないのは分かるが）」などであった。

生徒たちの意見からは、資料の内容をもとに、判断基準が「御家人の立場」や「御恩と奉公」という観点に移行している様子が強く見られた。御家人という立場を踏まえた理由づけは、2名から16名全員となった。自分の立場を選択する様子からは、資料を見て幕府側に即決する生徒が多く見られた。訴えの資料が出される前の立場との間で迷っている生徒が若干名見られた。この点から、御家人の葛藤を追体験しているというよりはむしろ、当時の武士たちの動きを体現しているかのような印象を強く受けた。

ウ 思考の第3階層…本質を探りながら、自分の考えを再構成する

○対面式の意見交換会を行い、多面的な視野から判断する活動

次に、幕府側と朝廷側に分かれて、対面式の意見交流会を行い、考えを深め最終決断をおこなう活動を行った。朝廷側を選択した生徒からは、「上皇に兵をむけることは、長い歴史をもつ朝廷に対して逆らうことだから、無礼にあたる」、「源氏の将軍は絶えていて、今幕府の実権にぎっているのは北条氏である」、「北条政子は、幕府を守ろうとしているだけで、みんなは利用されている」などの考えや、最初に出された意見から「上皇が兵を率いてきたら、幕府側は勝てない」、「幕府側が弱腰で、上皇を怖がっている」などを引用した。一方、幕府側は「自分たちは、鎌倉幕府の御家人」、「これからは武士の時代」、「北条氏がトップにいても、御恩に報いることが大事だし、勝てば生活が保障される」などの考えが出された。「迷っている」の立場の生徒2名に対して、朝廷側・幕府側双方から選択を迫る発言が出されたが、2名は判断できずにいた。思考の第1階層で、自分の考えを明らかにしたときと比べて、朝廷との兼ね合いや御家人としての立場、時代の流れ、幕府の立場など様々な視点からの意見が出され、それらを総合した活発な議論がなされた。議論をもとに最終判断をした結果は、以下の通りである。

朝廷側：1名、迷っている：2名、幕府側：13名（生徒数16名）

議論を通じての立場の変更は見られなかったが、ワークシートに記入された判断理由からは、様々な立場を比較考慮しながらも、確信をもって自分の考えを記入しているものが多数を占めた。

③ 事後学習「朝廷側・幕府側双方からみた承久の乱の歴史的意義」を考え、時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開についてより深く理解する学習

前時の学習をもとに、当時の時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開について学習した。承久の乱の動向を調べてきた生徒が3名おり、その生徒の調査結果も参考にしながら、学習のまとめを行った。後鳥羽上皇が自ら兵を率いなかったこと、上皇側に味方をし敗れて上皇の助けを受けようと御所を訪ねた武士たちを閉めだしたことを知り、最後まで朝廷側につく立場を貫いた生徒はショックを受けていた。

活動を振り返った事後アンケートでは、「判断するうえで、様々なことを考慮しなくてはならず大変だった。御家

尼将軍 北条政子の訴え

全国の御家人たちよ、よく聞きなさい。皆の者は、昔、朝廷の警備について、みじめな生活を送っていたことを忘れたのだろうか。そのような暮らしをあわれと思い、恩賞を与え、皆の領地を守り、安心して暮らせるようにしてくださったのは、今は亡き、頼朝公である。皆はその御恩を忘れてもよいのか。その御恩を忘れ、この鎌倉を都の武士どもに踏み荒らされてもよいというのか。こここのところをよく考えてほしい。それでも上皇に従うというのなら、それもよからう。その者たちは、今ただちに申し出よ。

資料3 北条政子の訴え

人の葛藤がよく分かった」、「北条政子は幕府の危機を救ってすごいと思った」、「北条政子は策士だと思った」、「武家政治が確立される過程がよくわかった」などの意見が得られた。

5 実践の成果と考察

本実践のねらいは、承久の乱における朝廷側・幕府側のそれぞれが御家人に対して働きかけた資料をもとに、御家人の葛藤を体験的に学び、ワークショップで子どもたちがそれぞれの考えや感想を交流していくことで、朝廷側・幕府側それぞれの思惑や歴史的意義を考え、多面的・多角的に考察していく力＝社会的な思考力・判断力を育てることにあつた。また、問題解決的な学習を軸とした一連の学びの中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成を、相互補完的に行っていく授業のあり方を探ることにあつた。

資料を読み取り、意見交換の場を通じて仲間の意見を傾聴し、仲間と学びあう中で自分の考えを深めさせるという目的は、ほぼ達成できたと考える。ワークショップの形式を授業に取り入れて歴史の当事者の立場を設定したことと、時代の分岐点となる事象やある種のジレンマ教材を取り入れたことで、生徒の主体的な活動を促し、生徒の思考過程を質的に高めることもできた。

6 今後の課題

本單元においては、「御家人の立場で考える」という点で、事前の学習を十分に生かすことができず、前半は個人の主観に基づく意見が多かった。歴史の当事者の立場に立って考えさせる活動を組む場合は、事前にしっかりと理解させ、意識させて正しい歴史認識を持たせるとともに、生徒から出た意見をもとに、考える基準について修正を行うなり、条件設定を行うなどの手立てが必要である。

思考力・判断力・表現力の育成のために、本実践のような学びあいの場面を拡充していくとともに、発問の工夫や意見交換など、日常の授業の中でできる取組の開発に努めていきたい。

注

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領』平成20年3月公示, p.31
- 2) 中央教育審議会「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申), 平成20年1月17日, p.79
- 3) 「座談会 基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成」, 『初等教育資料』平成20年9月号 (No.838), 文部科学省MEXT64, p.3
- 4) 同上, p.3
- 5) 松岡貴徳「思考力を育てる社会科授業の創造」, 『教育実践研究』No.15, 上越教育大学学校教育センター, 2005年, p.37
- 6) 荒井隆浩「思考力を育む歴史資料の活用について」, 『教育実践研究』No.18, 上越教育大学学校教育センター, 2008年, p.43
- 7) 池田岳康「社会的思考力を育成する社会科指導の展開」, 『教育実践研究』No.16, 上越教育大学学校教育センター, 2006年, p.41
- 8) 西塚智行「社会的思考力を高める指導の工夫」, 『教育実践研究』No.17, 上越教育大学学校教育センター, 2007年, p.31

資料出典

- 資料1 中学歴史資料集『学び考える歴史』, 浜島書店, 2007年, p.59 より筆者作成
 資料2 古川清行『絵と写真で学ぶ日本の歴史3』, 東洋館出版社, 1999年, p.24 より筆者作成
 資料3 古川清行『絵と写真で学ぶ日本の歴史3』, 東洋館出版社, 1999年, p.23 より筆者作成